

## 視察報告

### 1. 北京視察

日 程：平成 27 年 8 月 22 日（土）から 8 月 24 日（月）まで

視察先：北京国家体育場（通称：鳥の巣）

出張者：工藤和美委員

### 2. ロンドン視察

日 程：平成 27 年 10 月 28 日（水）から 11 月 1 日（日）まで

視察先：ウェンブリー・スタジアム

ストラトフォード・オリンピックスタジアム

エミレーツ・スタジアム

出張者：香山壽夫委員

2015年8月22,23,24 北京世界陸上視察

北京国家体育場（通称：鳥の巣） 収容人員 80,000

視察報告 工藤和美

- ① コンコースレベルの風の抜けが良く、日影では涼しく感じる程。スタンドは日差しを避けて、人々が席を移動していた。フィールドや周辺での風の設計が重要。
- ② ユニバーサルデザインの工夫が見受けられなかった。車いすの場所がペンキで床に示されているだけ。点字ブロック、手すり無し。パラリンピック時の対応を知りたい。
- ③ 座席の高さは要求水準と同じ。カラーリングが赤から上階の席はグレーにグラデーションしていた。人の入りが少なくても、観客のようにも見える効果があると聞いた。
- ④ 競技中も音楽が大音量で流れていて、大会を盛り上げていた。
- ⑤ パンフレットなどの紙媒体が一切なくて、ごみもなくすっきりしていた。
- ⑥ 陸上の試合時間が、朝と夜の2部に分かれていた。暑い時間帯12時から18時スタジアムは閉鎖され、掃除の時間に充てられていた。冷房の必要性を再検討した方が良い。
- ⑦ 100m直線コース上のスパイダーカメラからの映像が、メイン画面で主に流れていた。
- ⑧ スタジアムは広いので、直視できる範囲は限られ、大画面を見上げている観客が多かった。客席の上部は、人を入れなくて大型のスクリーンが設置されていた。（後利用時）
- ⑨ サイトラインが厳密に規定されているが、決勝などでは皆立って声援していたので、座って見える事はそれほどナーバスでなくても良いのかと思った。前に座っている人の影響が大きいので。
- ⑩ 夜の試合時間の照明がかなり明るくて、昼間のようなようだった。
- ⑪ 夜になるとスタジアムの外周が大スクリーンになって、内部の真っ赤な色がライトアップされ、象徴的な場所となっていた。
- ⑫ スタジアム周辺には広大な空地が準備されていて、大勢の人の出入りもスムーズだった。
- ⑬ セキュリティチェックが2段階で行われていた。
- ⑭ 英語の通訳ボランティアがいた。学生のようなようだった。



日陰に移動する観客とスパイダーカメラ



車いすのサインだけ、手すり無し



外壁のスクリーンに映像が流れ



総立ちで応援する観客

## ロンドンのスタジアム・視察報告

2015.11.11 香山壽夫

10月28日(木)、午前に羽田国際空港を出発、ロンドンに3泊3日滞在し、ロンドン・2012年オリンピック計画を遂行した中心的な存在である2人の専門家、1)英国貿易投資総省のディヴィッド・ベアード氏、そして2)ロンドン・レガシー開発公社のディヴィッド・ゴールドストーン氏と面談・意見交換を行い、また、3つの主要スタジアム、1)ウェンブリー・スタジアム、2)ストラトフォード・オリンピックスタジアム、そして3)エミレーツ・スタジアムを視察し、11月1日(日)午後、羽田国際空港着で帰国した。

### I. 二人の専門家との面談・意見交換

#### 1) 英国貿易投資総省、ディヴィッド・ベアード氏

ベアード氏は、ロンドン・2012・オリンピックの計画・立案と実施そして、その後世界各地で様々な計画を展開している「グローバル・スポーツ・インフラ」計画の専門家で、これまでの経験に基づき、大規模のスポーツ施設の計画においては、建築設計にかかる前の企画、構想に十分な時間と労力をかけることの重要性を力説された。日本の「新国立競技場」の新しい建設方針についての当方からの説明については、理解を示した上で、「デザイン・ビルド」の方式の採用は正しいと思うと述べた。また、様々な議論があったと聞いているストラトフォード・オリンピックスタジアムのオリンピック以後の改造計画について当方から質問し、ようやく2016年に完了するという、その経緯と問題点について説明があった。

#### 2) ロンドン・レガシー開発公社のディヴィッド・ゴールドストーン氏

オリンピック・スタジアムを眼下にし、オリンピック・パークの開発全体を望む公社上階の会議室で説明を受けた。かつて低湿地で工業地帯であったこの地域の開発は、既にオリンピック以前より進められており、オリンピック施設は、その開発にはずみをつける一つの手段であったこと、そして住宅地、ショッピングセンターを含むこの大規模な開発は、いまだに進行中のものであることに強い印象を受けた。

オリンピック・スタジアムの建築については、当初計画ではオリンピック終了後、席数を80,000席から25,000席に縮小する設計であった(上部座席と屋根を撤去、改装する)ものを、その後、計画を根本的に再検討し、当初の案とは反対に座席を前方に延長して屋根も補強拡大し、座席全体を覆う大きさにつくりかえることになったことが、説明された。そして将来の対応計画については、催事についての収支予測を含む綿密な計画と平行して建築の設計が進められることの重要性と、そして様々な意見を傾聴しつつも、最終的に断固とした意思決定の必要なことが述べられた。

### II. 3つのスタジアムの視察

#### 1) ウェンブリー・スタジアム

2007年に完成した90,000人を収容するイギリス最大の国立競技場であり、1923年の大英帝国博覧会施設の一部として最初のスタジアムが建設された歴史においても、また、年内を通じてスポーツから音楽のイベントに及ぶ多彩な活用においても、イギリスを代表する中心的施設である(図1)。観客席の形状は、フットボール競技の際の最適条件を考慮に決定した上で、陸上大会等を行う際には、専用の床が芝生フィールドの上部と、

前方観客席上部約 5M の高さに設置され、(他の催事の際にも、必要に応じてその目的に適した床が設置されるよう計画されている。) この方式は大変有効であるので、他国 (例えばバルセロナ等) においても利用される例が増えているそうである。

屋根は観客席上部のみを覆うが、バックスタンド側の前方と、ゴール側両側は開閉可能となっている。高さ 130M の大アーチは、メインスタンド側の屋根を吊る構造上の働きを持たせているものの、それは附属的な働きであり、基本的な意味は駅からの壮大なアプローチに対応した凱旋門アーチとしてつくられていることが、良く理解された (図 2)。

## 2) ストラトフォード・オリンピックスタジアム

広大な公園の一部として計画されているこのスタジアムは、1 階地上部分の周囲を出来るだけ開放的にして市民が自由に周遊できる空間としている点に大きな特徴がある。当初の構想においては、オリンピック後、規模を 25,000 席に縮小する計画であったが、その案はその後の検討により撤回され、65,000 席の競技場として改造設計が行われ工事が進行中である。現在工事は一時中断されてワールドカップ・ラグビー大会の会場として用いられている。我々はその 3 位決定戦が行われている状況において、改造の状況および利用状況を視察した (図 3)。新たな改造のポイントは 3 つある。

第一は、競技場と観客席の一体感を強めるために、観客席 (南北両側、すなわちゴール後方) を拡張して、(既存座席はそのまま残して上に被せている。) ピッチに近づけたことである。これは実際に試合を観戦して、大いに効果を上げていると感じた。しかしむしろ、その結果、東西側 (メインおよびバックスタンド側) の観客席前の空地が空疎な感じを生んでいる。新設観客席と上層の既存観客席との間に、15m 巾の平床部分が生じることについて、観客席の一体感を損なうものと批判があったそうであるが、実際に観戦してみると、そんな心配は感じられなかった (図 4)。

第二に、屋根は、既存の構造を残しつつ、補強し、拡張しているが、大きく伸ばしたにもかかわらず、大きさにならず、軽快さが得られ成功している。

第三に、売店、飲食、便所等のホスピタリティ施設は、仮設的な軽い建築として、催事に応じて設置することを目指していると説明を受けたが、これも適切な方針であると理解した。

## 3) エミレーツ・スタジアム

サッカー専用スタジアムとして建設、運用されており、イギリスサッカークラブの名門「アーセナル」のホームスタジアムである。観客とプレーヤーとの一体感をつくり出し、熱気を高めるために十分な可視線を確認しつつ、観客席をピッチに出来るだけ近づけ、ひとつの模範となる形状となっている。更にコーチや控え選手のベンチを観客席の輪郭内に組み入れる形をとったり、ピッチのレベルを、周囲より約 60cm 上げて、観客の視線に近づける等、一体感の強調に細かい工夫をしていることも興味深いことであった (図 5)。クラブの運営がイギリス社会伝統のクラブ組織に根ざし、社会的名誉と特権、それに付随する義務、奉仕の念に支えられ、財政的にも安定している点は、一朝一夕に日本に取入れることは難しいにしても、学ぶべき点が多いと感じられた。

以上。



図1/ウェンブリー・スタジアム



図4/ストラトフォード・オリンピックスタジアム



図2/ウェンブリー・スタジアム



図5/エミレーツ・スタジアム



図3/ストラトフォード・オリンピックスタジアム